多水準自己概念尺度に関する研究

○田中堅一郎¹・宮入小夜子² (非会員)

(¹ 日本大学大学院総合社会情報研究科・² 日本橋学館大学)

キーワード: 個人的自己概念, 関係的自己概念, 集合的自己概念

A Study on the Levels of Self-Concept Scale (LSCS)

Ken'ichiro TANAKA¹ and Sayoko MIYAIRI^{2,*}

(¹ Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon Univ., ² Nihonbashi Gakkan Univ.)

Key Words: individual self-concept, relational self-concept, collective self-concept

目 的

Sedikides & Brewer (2001)によれば, 自己概念は個人的自己概念, 関係的自己概念, 集合的自己概念の3側面からとらえることができる。個人的自己概念とは, 社会的環境の中で自己を他者から区分できる特性に焦点をおくものであり, 関係的自己概念は, ある個人とその重要な他者との関係に基づいて定義される。そして, 集合的自己概念とは, 個人にとって重要な集団や組織に対するメンバーシップの大きさに基づいて定義される。Brewer & Gardner (1996)も同様に, 自己概念を個人水準 (individual level), 関係水準 (relational level), 集合水準 (collective level) の3つの水準からとらえた。

多水準自己概念尺度 (The level of self-concept scale; LSCS) は, 個人概念が個人水準, 関係水準, 集合水準の3つの水準から構成されるという Brewer & Gardner (1996)や Sedikides & Brewer (2001)の考え方に基いて, Johnson, Selenta, & Lord (2006)によって作成された。したがって, この尺度は個人水準, 関係水準, 集合水準の3つの下位尺度からなり, 各々の下位尺度は5項目で構成されており, すでに北米や欧州では組織行動指標の独立変数の一つとして使用されている。

本研究では, LSCS の日本語版を作成し, その信頼性を検討することを目的とする。

方 法

手続き

N大学の通信制大学院に在籍する社会人大学院生5名, および当該大学院修了生2名に, 彼らが勤務する組織や職場の同僚に対し, 所定の調査票に回答して回答後切手の貼付された所定の封筒に入れて郵送するか, 回答済みの調査票をPDF化して著者の一人が所属する研究室へ返信するよう依頼してもらった。その結果, 163名からの返信があった。

調査期間

調査票の送付は, 2013年3月11日に行われ, 同年4月8日までに返信された。

調査回答者

163名からの回答のうち, 全質問項目の3分の2以上が無回答であった1名を除く162名の回答が分析対象となった。

調査項目 多水準自己概念尺度 本研究では, Johnson et al. (2006)における Appendix A に掲載されている項目内容を著者の一人が日本語訳し, 英語表現に堪能な別の著者が原語との対応をチェックして一部の訳語を修正して15項目からなる日本語版多水準自己概念尺度が作成された。これらの項目への回答は, 5段階評定 (1: 「まったく当てはまらない」 から 5: 「非常によく当てはまる」) で行われた。

結 果

多水準自己概念尺度についての探索的因子分析

15項目からなる日本語版多水準自己概念尺度について, 因

子分析を行った。その際, 因子数を3と指定して初期解を最尤法で算出し, プロマックス回転を施した。分析の結果, まず3因子としての適合度検定は $\chi^2 = 80.33$ ($p = .069$) となり, 3因子モデルのデータへの適合はまずまずであるとみなされる。因子負荷量の高い値を示した項目群から考えて, 第1因子は関係水準, 第2因子は集合水準, 第3因子は個人水準とみなすことができる。

多水準自己概念尺度についての確証的因子分析

15項目が各5項目から構成される3因子モデルに適合するかどうかを検討するために, 共分散構造分析による確証的因子分析を行った。各因子 (個人水準, 関係水準, 集合水準) が5項目から構成される3因子モデルを仮定して適合度を算出したところ, かなり高い適合度を示した ($GFI = .908$, $CFI = .924$, $RMSEA = .059$)。この結果は, 1因子モデルを仮定した場合の適合度 ($CFI = .606$, $NFI = .545$, $RMSEA = .126$) と比較して明らかに高い適合度とみなされるので, 3因子モデルがよりデータに適合的であると判断される。

信頼性の検討

LSCS を構成する3つの下位尺度について α 係数を算出したところ, 個人水準: .710, 関係水準: .752, 集合水準: .746 となり, これらの値は, LSCS に関する先行研究の信頼性係数とほぼ同じ水準とみなされるので, 尺度としての整合性は高いと判断できよう。

考 察

分析結果から, 本研究で作成された LSCS 日本語版の信頼性は高いとみなされる。LSCS はすでかなりの研究で使用されているが, この尺度がしばしば組織行動および態度指標の説明変数として使われていることは注目される。今後の課題として, LSCS が影響を及ぼす行動および態度指標について日本の組織での検討が望まれる。

引用文献

- Brewer, M.B. & Gardner, W. (1996). Who is this "we"? Levels of collective identity and self-representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 83-93.
- Sedikides, C. & Brewer, M.B. (2001). *Individual self, relational self, collective self*. Philadelphia: Psychology Press.
- Johnson, R.E., Selenta, C., & Lord, R.G. (2006). When organizational justice and the self-concept meet: Consequences for the organization and its members. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **99**, 175-201.

本研究は, 平成24年度・25年度文部科学省科学研究費補助金 (挑戦的萌芽研究, 課題番号: 24653167) の支援を受けた。